

演題 3

下顎骨骨塩定量と下顎底部皮質骨の厚さに関する研究（第一報）

— 学童期における臨床的評価 —

○葛 立宏、牧 憲司、高橋 忠、

森本泰宏、木村光孝

九歯大・小児歯

目的：小児の顎骨の形態学的計測や顎骨の内部構造を知る上で重要な骨塩量の基準値を知ることが極めて重要である。今回我々は、学童期小児の下顎骨の骨塩定量を行うとともに、同一被験児にパノラマエックス線写真による下顎底部皮質骨の厚さの計測を行った。

対象および方法：対象は、九州歯科大学附属病院小児歯科外来を受診した6歳から8歳児で臨床的立場から正常咬合を有し、下顎臼歯部に齲蝕や実質欠損のない男児24名、女児24名である。

下顎底部皮質骨の厚さの計測方法としてはパノラマエックス線写真をトレースし、1/20mm目盛りのノギスで5回計測し、その平均値を下顎底部皮質骨の厚さとした。なお今回使用したパノラマエックス線写真の下顎第一大臼歯部における垂直方向の拡大率は1.34であった。

次に骨塩量の測定方法としては、フィルムホルダーにより同一被験児の右側下顎第一大臼歯部にA1当量に換算する際に基準となるデンタルフィルムを固定し、口内撮影法により撮影を行った。デンタルフィルムはコニカマイクロフォトメーターPDS-15により光学的観察を行い、Scanning patternにより描出した値は、すべてA1当量値に換算した。

結果：下顎底部の厚さと骨塩量の平均値は、6歳、7歳、8歳と年齢が高まるにつれ増加傾向にあった。男女間のT検定の結果、下顎底部皮質骨の厚さ、骨塩量ともに有意差は認められなかった。6・7歳、7・8歳間では有意差は認められず、6・8歳間では8歳が6歳に対し有意に大きな値を示した。骨塩量は6・7歳間で有意差は認められず、6・8歳、7・8歳間では年齢の高い後者が前者に対し有意に大きな値を示した。

被験児48名の下顎底部皮質骨の厚さと骨塩量の相関係数 $r=0.892$ であり、各年齢別の下顎底部皮質骨の厚さと骨塩量の相関係数は6歳 $r=0.914$ 、7歳 $r=0.708$ 、8歳 $r=0.953$ であった。

演題 4

通園障害児の歯科衛生管理（第2報）
— 乳歯齲蝕罹患率の経年変化を中心として —

○武田康男、竹辺千恵美、野中歩
福元直美、平野洋子

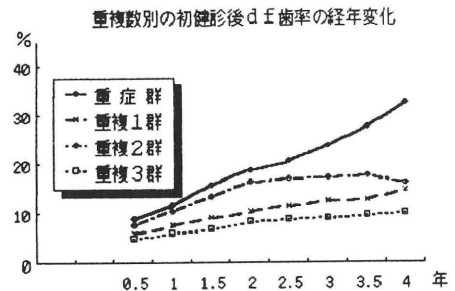
北九州市立総合療育センター・歯科

通園障害児の歯科衛生管理に関して演者らは第1報として重症度の1指標としての疾患重複数と初診時口腔所見との関係を報告した（1986）。今回、同通園児の長期間にわたる乳歯齲蝕罹患率の変化を追跡したので、その結果を報告する。

〔資料〕初診時の対象者495名（男児283名、女児212名、平均月齢25.4ヵ月）の口腔所見に関する混合型経年資料をもとにした。対象者を疾患重複数から重複1、2、3群と重症群の合計4群に分類し以下の調査を行った。

〔調査項目〕(I)重複数別のdf歯率の年齢変化、(II)初健診後のdf歯率の経年的変化を求め、さらに(III)重複数と初診時の口腔環境との関係（エナメル質形成不全、歯列空隙、歯垢付着度、齲蝕活動性）、シーラント処置歯率等に関して検討した。

〔結果〕(I)重複数別のdf歯率の年齢変化：重症群は他の3群に比べて全年齢、相対的に高いdf歯率を示した。df歯率は5.5歳時31.69%で、最も低い重複3群の14.16%の2倍以上の罹患率であった。(II)重複数別のdf歯率の経年変化も(I)と同様の結果が得られたが、重症群のdf歯率の増加傾向は他の3群よりも顕著であった(図)。



(III)重複数と口腔環境との関係では、重症群に広範囲に乳歯エナメル質形成不全が認められ、また高い齲蝕活動性を示した。以上の諸結果は、重症群の高い易齲蝕罹患性を示唆している。